

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2007年）

11月 1日 今日の通読箇所 テモテへの第一の手紙、1：1～11  
「次の世代へ」

「テモテへの第一の手紙」はパウロが使徒行伝28章、ローマでの囚われの期間が終わり解放され、再び伝道に尽力した時期に、テモテに送った手紙だと言われます。この時テモテはエペソ教会の牧師でした。パウロは牧会に奮闘しているテモテの指導と同時に、長い伝道生涯を走り続けた今、次の世代にバトンを確実に渡さなければならないと考えていました。信仰生活における自己訓練、神の言葉を忠実に説き教えること、家庭生活と教会生活の秩序、忠実な人々に働きを委ねること等、大切な教えを記しています。殊に誤った教えとその影響を憂慮し、偽りのない信仰を土台とする清い心、正しい良心、愛を教え、「律法の役割」は罪の自覚を生じさせ「キリストへ導く養育掛（がかり）」で（ガラテヤ3:24）、正しく良いものだと教えています。

11月 2日 今日の通読箇所 テモテへの第一の手紙、1：12～20  
「あわれみの見本」

パウロは、主イエス・キリストへの心からの感謝を持ってこの節を始めます。なぜなら、彼は第一に「以前には、神をそしる者、迫害する者、不遜な者であった」（13節）が、神様のあわれみのゆえに赦されたことを深く感じているからです。もう一つは、「罪人のかしら」（15節）のような自分が、救いの恵みにあずかり、福音の器として神様が選んで下さったことを知ったからです。それは単にパウロ自身のためだけではなく、キリストがパウロを「今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範」（16節）とされようとしたからです。パウロ自身は、自分を「キリストのあわれみの見本」と自覚していたのです。

11月 3日 今日の通読箇所 テモテへの第一の手紙、2：1～7  
「安らかな一生」

パウロもテモテも、そして名前が知られない多くのクリスチャンたちも、それぞれの時代に信仰をもって生きていました。その時代特有の困難や闘いがありました。しかしパウロは「すべての人のために、王たちと、上に立つ重い責任のあるすべての人たちのために祈りと感謝を捧げるように」勧めています。それはわたしたちが安らかで静かな落ち着いた一生を信仰深く、謹厳に過ごすためです。このような祈りは良いことであり、神様のみこころにかなうことです。やがてパウロは、ローマで斬首され地上の生涯を閉じました。激しい迫害の時

代でした。しかし、お約束のようにパウロの心は神様の平安で守られ、信仰と、愛に溢れていたのではないのでしょうか。

11月 4日 今日の通読箇所 テモテへの第一の手紙、2：8～15

「礼拝の場での男女」

パウロは、礼拝における男と女のあり方について語っています。まず男性に対しては、「怒ったり争ったりしないで」と前置きをして「きよい手をあげて祈ってほしい」と勧めています。テモテが牧会していたエペソ教会では、男性の体面や虚栄心のゆえに、祈りが妨げられることもあったからでしょう。次に、教会における女性の望ましいあり方を勧めています。第一は、「つつましい身なり」で、良いわざを持って、神の前に出るよにとということです。第二は、「おしゃべりを慎みなさい」とということです。集会の秩序が、女性のこの2つの弱点ゆえに乱れたことがあったからでしょう。パウロが、これらのことを命令したのは、男性は祈りの戦士として、女性は従順な働き手として期待したからです。

11月 5日 今日の通読箇所 テモテへの第一の手紙、3：1～7

「すばらしい役目にふさわしく」

「監督」は、5章の「長老」と同じ意味のようです。働きの面からは「監督」、立場の面からは「長老」と呼んでいたようです。「監督」とは「管理する者」「見張る者」「見守る者」等の意味がある相で、年長者が当たるが多かったので「長老」とも呼ばれました。5章には当時の「長老」が今の牧師のように「宣教と教えのため」仕えていたと記されています。ですから今で言えば教会に仕える牧師や役員、各種の責任をもって奉仕している人々に該当するのだと思います。「旅人をもてなし」(2節)とは、初代教会時代は使徒などの巡回奉仕によって宣教がなされていたという時代的背景もあったようです。

11月 6日 今日の通読箇所 テモテへの第一の手紙、3：8～16

「真理の柱」

監督の資格に続いて、8節からは執事の資格が記されています。最初の「執事」は、使徒行伝6章に見られます。執事の仕事は、監督のもとで、牧会の実際的な働きの補助者役割を果たす重要なものでした。こうしてパウロがこの手紙を書いたのは、パウロの訪問が遅くなっても、テモテが教会で「どのように行動すべきか」を知らせるためでした。なぜなら教会は、真理の柱、真理の基礎だからです。「真理」とは、キリスト教信仰全体の正しい教えと真実のことです。

そしてこの世との関係において、人々が地上の教会を見る時、教会はキリスト教真理の証しの場であり、その真理を堅く守るべき所であるからです。

11月 7日 今日に通読箇所 テモテへの第一の手紙、4：1～10

「神様の贈り物」

ある人達は結婚を禁止したり、食物を断つことを命令します。彼らは「良心に焼き印をおされている」とあります。やけどをしたときの皮膚は、ヒリヒリして鋭敏に過剰反応します。彼らは良心がやけどをしたように、物事に対して過敏、過剰に反応し偽りの教えを語るのです。しかし、神様がお造りくださったものはみな良いものです。食べ物は神様が備えてくださった贈り物です。私たちは食前の祈りによって神様に感謝を捧げ、改めて恵みを確認します。みことばの教えによって、これらが神様の贈り物であることを知り、祈りのうちに感謝するのです。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る。(ヤコブの手紙 1:17)」

11月 8日 今日に通読箇所 テモテへの第一の手紙、4：11～16

「信者の模範」

テモテはエペソ教会の牧師です。この教会は歴史のある大教会でした。立派な先輩の信者の人たちもたくさんいました。そのような中で、まだ牧会も人生経験も浅いテモテにとっては、その期待の大きさに潰されそうになることが度々あったのだと思います。そこでパウロはテモテに「あなたは、年が若いために人に軽んじられてはならない。むしろ、言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい」等、いくつかの勧めを書いたのです。それはパウロが、ここで牧会者としての個人的能力や技量をテモテに求めているわけではありません。牧会者が、牧者としての努めに専心して励むように勧めているのです。そしてこれらは、牧会者だけでなく、大なり小なりリーダーとなる全ての人に対する勧めなのです。

11月 9日 今日に通読箇所 テモテへの第一の手紙、5：1～8

「家族のように」

教会には幅広い年齢層の人々が集っています。パウロはテモテに、次のように指導しています。目上の人々には父母に対するように、若い人々には兄弟姉妹に対するように、愛を持ってみことばの教えに基づいて勧め、常に尊敬と純潔が伴うべきであること。続いて、福祉制度の整わなかった当時、教会の役割と判断基準が記されています。私たちにも意味深い教えです。ご主人を亡くしたご婦人については、子か孫が孝養を尽くすこと。しかし、真のやもめに対して

は、十分に支え助けること。彼女は、主のご降誕を待ち望んでいたアンナのように望みを神において祈りのうちに過ごしているのです。また、だれでも自分の家族の必要を顧みることが、大切な責任であると同時に信仰の証なのです。

11月10日 今日に通読箇所 テモテへの第一の手紙、5：9～16  
「真のやもめ」

古代世界においては、やもめが働いて生活費を得ることはほとんど不可能でありました。そこでパウロは教会に真のやもめを助けることを命じています。その真のやもめの条件には、肉親も身よりもないこと、年齢が60才以上であること、さらに教会の奉仕に一生を捧げたものでなくてはならないという、登録の枠がありました。年齢枠があるのは、年を重ねてきた人たちが、この世の快樂などに誘惑されることも少ないという判断からだと思います。11節以下に若いやもめのことが記されているのは、誘惑に陥らないための配慮でしょう。こうして選ばれた真のやもめたちは、教会の働きに大きく貢献したのです。

11月11日 今日に通読箇所 テモテへの第一の手紙、5：17～25  
「長老について」

パウロは長老について指導しています。穀物をこなす牛が足元に落ちた穀物を食べるのをとどめてはならない。同じく、職務を良く果たしている長老は、二倍の尊敬と十分な報酬を受けるにふさわしい人としなければなりません。特に宣教と教えに忠実に労している者にはそうしなければなりません。長老に対する裁判を要求する告発は、ふたりか三人の証人によって確証されない限り受け付けてはなりません。罪を犯し続けている場合には皆の前で訓戒を与えなさい。他の者達が戒めを受けて有益な畏れを抱くためです。按手は慎重でありなさい。テモテの胃弱のためには、医療的な意味で少量の葡萄酒を用いなさい。罪は遅かれ早かれ明らかにされます。善行も隠れたままではありませぬ。

11月12日 今日に通読箇所 テモテへの第一の手紙、6：1～10  
「偽教師の特徴」

牧会上の諸問題の最後は、奴隷で救われた人に、愛と尊敬をもって行動するように勧めています。パウロはこの手紙の最後に、テモテへ種々の勧めをしています。最初は偽教師の問題です。彼らは、聖書に教えられていることと違ったことを教え、キリストの健全な言葉、ならびに信心にかなう教えに同意しない人たちです。しかし彼らの顕著な特徴は、「信心を利得と心得る」ところです。彼らは信仰の対象が第一義的に重要ではなく、信仰がいかに利得をもたらすかということでした。結局、信仰を手段とする御利益宗教だったのです。だから

パウロは信仰が手段化されると、祈りや断食等が、祝福を得る条件になり、妬みや争いや裁き合いが生じ、それが絶え間なく続く結果になると警告したのです。

11月13日 今日に通読箇所 テモテへの第一の手紙、6：11～21  
「信仰の善戦」

信仰生活途上にはいろいろな誘惑と罪が待ち受けています。テモテへの注意と勧めはいつでも大切です。悔い改めと信仰によって与えられた永遠のいのちにふさわしく歩み、最後まで信仰を全うするために、信仰の戦いをりっぱに戦いぬくことが大切です。10節までのような誘惑と罪をすべて避けなさい。次に、義、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。主の再臨まで、主の戒めを汚されることなく、非難されないよう守りなさい。託された正しい信仰の教えを保護しなさい。俗悪なむだ話や偽りの知識による反対論を避けなさい。この世で富んでいる者は高慢にならず、不確かな富に望みを置かず、すべてを豊かに備えて楽しませて下さる神に望みを置くように。未来に富を蓄えるため、良い業に富むよう命じなさい、と記されています。

11月14日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、1：1～7  
「テモテへの励まし」

テモテへの第二の手紙は、パウロが「わたしの鎖を恥とも思わないで」（16節）と言っているように獄中で書いたものです。それもパウロが死を目前にしてテモテに送った手紙で遺言書です。テモテには臆病で小心な所がありました。ですから最後にパウロは、テモテに神様が与えてくださった賜物を思い起こさせ、励ましているのです。その神様からの賜物とは「力と愛と慎みとの霊」です。「力の霊」とは、生まれつき臆病な人をも、困難に大胆に直面させる力です。「愛の霊」とは、全てのクリスチャンに必要なものですが、特に牧会者には必要なものです。「慎みの霊」とは、自制心、節制のことです。ある人は、これを「聖徒の健全さ」と言っています。

11月15日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、1：8～14  
「福音のために」

テモテは7節のように「臆病」だったのでしょう。また「主のあかしをすること」を恥ずかしく思うことがあったのでしょう。テモテにもこんな面があったのか、と驚くと同時に慰められます。このテモテに、パウロは「神の力にささえられて、福音のために、わたしと苦しみを共にしてほしい」と願い、福音の尊さを語っています。福音は、救主キリスト・イエスの出現によって、明らか

にされた尊い恵みです。キリストの出現以前は闇に包まれて「いのちと不死」について不明確でした。しかし、キリストによって死は完全に滅ぼされ、勝利がもたらされました。彼を信じる者は罪の赦しと勝利に与る者とさせていただけなのです。ですからパウロは「あなたにゆだねられている尊い」福音の真理を聖霊によって守るようにと念を押しています。

11月16日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、1：13～18  
「真実な僕」

ここでパウロは、牧会の事例をあげています。ローマでのパウロの二度目の入獄は、以前と違って厳しいものでした。それでパウロの友人であることが自分の身を危険にさらすこととなります。エペソ教会の幾人かは、自分の身の安全を計ってパウロを見捨てました。その中には、特に親しい間柄であったフゲロとヘルモゲネもいたのです。一方、パウロを励まし元気づけた人々も数多くいました。その中でもオネシポロは特筆すべき信徒です。彼がエペソでパウロに一生懸命に仕えたのは信徒たちの周知の事実です。またローマでは、自分の危険を顧みず、たびたび獄中のパウロを尋ね、彼を助けました。そこでパウロは、こうした真実な僕のいることをテモテに思い出させて、励ましたのです。

11月17日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、2：1～7  
「恵みによる強さ」

パウロは1章8節で「神の力にささえられて、福音のためにわたしと苦しみを共にしてほしい」と語り、ここで再び「キリストの良い兵卒として、わたしと苦しみを共にしてほしい」（3節）と語っています。「テモテへの第二の手紙」はパウロの獄中書簡で、パウロはこれを最後に殉教しました。テモテに「急いで来てほしい」（4章9節）と願いつつ、自分の最後を予感し遺言のように手紙を記したのでしょう。命の限り、もっと多くの人々に福音を伝えたかったパウロは今、若いテモテに福音のための労苦を願い、テモテが受けたバトンを忠実な人々に手渡し、神様の働きが拡大し続けるよう願ったのです。司令官を喜ばせようと務める兵士、規定に従う競技者、労苦を惜しまない農夫に例えられた姿はパウロ自身が努力してきたことでした。同時に恵みによって強くされた歩みでした。

11月18日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、2：8～13  
「わたしの福音」

8節で、パウロが「わたしの福音」と言っているのは、パウロの伝えた福音が独特であったという意味ではなく、初代教会も同様に告白していた福音のこと

です。誰でも「私たちの福音」が「私の福音」にならなければ、どんなに素晴らしい福音でも、その人にとっては何にもなくなるからだと思います。そしてパウロの言う「わたしの福音」とは、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリスト」だと言うのです。ここでのパウロの思ひは、困難な状況のもとで懸命に戦うテモテを励ますことでした。そこでパウロはテモテにまず、キリストは死んで葬り去られたお方ではなく、「死人のうちからよみがえった」お方、今も生きておられるお方だと強調して書いたのです。

11月19日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、2：14～21  
「ゆるがない土台」

14節には「言葉の争い」をしないように命じなさいとあります。言葉の争いは、お互いに何の益もなく、そればかりか聞いている人々を混乱と破滅に陥れます。また俗悪なむだ話、真理からはずれた教えを語る人々に注意しなさい。それは、人々を不信心に陥れ、癌のように腐れ広がるからです。テモテに「真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人となって神に自分をささげるように努めはげみなさい」と命じています(15節)。「ささげる」はローマ12章1節の「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」と同じ言葉です。「主の名を呼ぶ者は、すべて不義から離れよ」(19節)以下のように主人に役立つものとなるよう勧めています。

11月20日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、2：22～26  
「指導者への勧め」

ここからテモテに対する直接的な勧めが語られています。パウロは、まず「若い時の情欲を避けなさい」と書いています。テモテが「若い」と言っても40歳位だと思いますので、ここでの「情欲」は性的な欲望というよりも、短気、論争好きなどを指しています。そして積極的に「義と信仰と愛と平和」を追い求めるように説かれています。これらはすでにテモテ第一の手紙に書いておいた事ですが、パウロが第二の手紙にも書いたのは、テモテにこの姿勢に欠けてはならないと願っているからだと思います。しかし、この歩みは牧者テモテに、単独で、しかも孤立した形でがんばることが求められているわけではありません。「主を呼び求める人々と共に」、共同作業によつての完成を勧めているのです。

11月21日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、3：1～9  
「苦難の時代」

終わりの時代に現れる人々の様子が記されています。終わりの時、大きな悩み、耐え難い危険な時代がきます。その時の人間の姿が19挙げられ「そのような

人々を避けなさい。(5節)」とパウロは言います。2節～5節には、全く自己中心的な者、富に対して異常なほどの欲求に取りつかれている者、ごう然と他の人を見下す者、彼らは無礼で、神様を嘲り、親に対して不従順で、感謝の心がなく、俗悪です。彼らは自然な人間としての愛情に欠け、和睦やなだめを受け入れません。彼らは人をあしざまに言う紛争製造屋で、倫理と行いにおいてだらしがなく、粗暴で、善を嫌う者です。彼らは二心の者で、向こう見ずで、自負心でふくれあがった者、快樂を愛する者です。彼らは敬虔な様子をしていても、その行いは自らの告白とは正反対です。

11月22日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、3：10～17

「救いに至る知恵」

パウロはテモテに向かって、彼がパウロの教え、歩みによくついてきてくれたことを賞賛しています。「わたしの教」(10節)とは、主イエス・キリストの福音のことで、みことばに基づいて福音を語ってきたパウロは、数多くの迫害を受けました。その体験から「キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」と書いたのです。この世が神様に背を向けている限り、この真理はいつの時代も変わらないでしょう。だからパウロはテモテに、自分が教えかつ両親より学んだ正統的な聖書の教えに留まるように勧めたのです。それは聖書が「キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を与えうる書物」だからです(15節)。

11月23日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、4：1～8

「義の冠の望み」

ローマの獄中でパウロは、生涯の最後を目前にしていました。迫害や苦難の嵐が吹き荒れて、殉教しなければならぬとしても、彼は、目の前の嵐に心を奪われることなく、やがて現れる神の国を望み見っていました。ですから、神様のみ前に揺るがせにできないことが何かを常に心に刻み、彼自身そのように生きて来ましたし、今、テモテに「御言を宣べ伝えなさい。」と命じています。そして今、パウロは生涯を顧みて「信仰の戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした」と言うことができました。私たちにも、個人個人にとっての信仰の戦いがあり、主の御心のうちに備えられた、それぞれの走るべき行程があります。やがて授けられる義の冠を望み見つつ、信仰の歩みを全うさせていただきたいものです。

1 1月24日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、4：9～15

「上着と羊皮紙」

テモテに「急いで早くきてほしい」と願ったのは、最後の訓戒を与えたかったとも言われます。共に労苦する勇気を失い、去った人もいましたが、クレスケンスやテトスは伝道に派遣され、何名かの協力者が記されています。医者ルカはパウロのそばで仕えていました。「上着」は兵士や旅人が用いた、円形で真ん中からかぶる防寒用のマントです。しかし、たいへん重かったので、不要なときにはやっかいでパウロも、カルポの所に残してきました。「羊皮紙」は、なめし革製で、重要な文書を書き記すのには、パピルス製よりも用いられました。最後が迫っていた時、パウロが読みたかった書物は何だったのでしょう。イエスさまのお言葉集とも、パウロ自身の原稿とも言われますが、旧約聖書の写本が含まれていた可能性はあると言われています。

1 1月25日 今日に通読箇所 テモテへの第二の手紙、4：16～22

「最後の言葉」

ローマの法廷では最終判決の前に何回かの尋問が行われたそうです。今回の入獄中に「第一回の弁明」の機会が与えられました。しかしパウロを弁護するはずの友人たちは去ってしまいました。パウロは、当時の最大の都市であるローマの法廷に、一人で立ち、そこを宣教の場として用いたのです。「主はわたしを助け、力づけてくださった」と記し、御国の栄光を望み御名を崇めています。最後に信仰の友人たちに挨拶を送ると同時に、テモテには「冬になる前に急いで来てほしい」と願っています。上着の件だけでなく、パウロの最後の裁判が近づいていたからです。テモテは、入獄中のパウロから自筆の手紙を受け取り、どんなに胸に迫ったことでしょうか。「主があなたの霊と共にいますように」という、主の御臨在を願う祈りが、パウロの手紙の最後の言葉でした。

1 1月26日 今日に通読箇所 列王紀下 13章1～9

「短い治世」

北王国イスラエル、南王国ユダとも、順々にいろいろな王が立ちそして死んでゆく。ここに革命によってイスラエルの王となったエヒウの子、エホアハズ王の、17年の短い治世が記してある。エヒウの改革も、宗教的に見ればそれ程純粹ではなかったが、それさえ、エホアハズの代になると生ぬるくなっている。折からスリアの圧迫でイスラエルは次第に貧しく、きゅうくつになっていった。それでもエホアハズは一応神を恐れていたもので、その祈りをいれて、神はスリアからイスラエルを助けて下さった。またエホアハズは父王エヒウに似て、一応勇武な人物でもあったようだ。しかしここに記された、彼の貧弱な軍隊の規

模を見れば、国威衰退の気運は覆うべくもない。

11月27日 今日に通読箇所 列王紀下 13章10～19

「何事も徹底」

エリシャは長い奉仕を終って、今や世を去らんとしている。その病床をおとずれた若いヨアシ王に、弓矢を持たせて与えた教訓は、要するに「何事も中途半端でなく、何事にも徹底せよ」ということだった。イスラエルにおいても、時に立ち上って宗教改革に努力する王もあったが、怨むらくはいつも不徹底だったのである。その間、国はずるずるべったりと亡国に向ってゆく。この時、ヨアシ王に与えられた老エリシャの訓戒は「神に向っては窓を開いて徹底的に祈れ。自分に対しては矢を地に向けて徹底的に悔改めよ。敵に向っては、あるいは奉仕においては、徹底的な勝利まで頑張れ」ということだった。

11月28日 今日に通読箇所 列王紀下 14章1～14

「王様殺し」

12章19～21を見れば、ユダのヨアシ王は、国内の不満分子の徒党に殺されたと見える。しかし王家を支持する勢力もあって、彼らがヨアシ王の遺児アマジヤをもり立てて王位につけたものと思われる。彼は王位が安定したころ、父王を殺した首謀者たちを殺して報復した。のみならず南方エドムを攻略して国土をふやした。なかなか勇ましい王様だ。彼は今度は北方イスラエルにも戦争をしかけ、この方面にも領土の拡張をはかったが、しかしこの戦争は散々な敗北で失敗に終わった。その結果は、家臣の不満を招くことになって、父王と同じく、家臣の手にかかって殺されるハメとなった。

11月29日 今日に通読箇所 列王紀下 14章17～29

「宗教的斜陽化」

アマジヤ王は、不平党が徒党を結んで険悪な空気になって来たのを察知して、エルサレムを離れてラキシに逃亡したのだったが、恐らくエルサレムからまわされた刺客に殺された。しかしユダ王国の場合は、北方イスラエル王国の場合と違って、こういう時でも、王の遺体はエルサレムに運んで来て葬るし、その王子アザリヤ、16才を立てて、一応王とするのだ。しかし今や、イスラエルにおいてもユダにおいても、宗教的、道徳的、政治的斜陽化の姿は明白になって来ている。なおしばらく神のあわれみによって、外敵の決定的な攻撃から守られているものの、この状態では神の裁きによる亡国の運命は、もう時間の問題と言うべきだ。

11月30日 今日の通読箇所 列王紀下 15章1～12

「重い皮膚病の王」

それでもアザリア王は、若年16才で即位し、52年王位にいたと言え、一応満足すべきかも知れない。しかし晩年は重い皮膚病となって隔離された。そして王子ヨタムの摂政に頼らざるを得なくなったのは気の毒な次第であった。一方、イスラエルの王ゼカリヤは、在位わずか六ヶ月、イブレアムに臨幸した時、シャルムにひきいられた徒党の手によって暗殺された。病気といい死といい、いわゆる無情の風は、金城鉄壁と言えども防ぎがたく、王の身分をもってしても拒否できない。我々はただ神のみが「わが城、わが盾」であることを学ぼうではないか。